



**International Development
Youth Forum 2018
Final Report**

**国際開発ユースフォーラム 2018 報告
書**

“How should we co-exist with ICT? Does
ICT lead to peril or prosperity?”

“How could the use/advancement of ICT contribute to achieving
inclusiveness within society?”

11th – 18th , March, 2018

目次

はじめに

| | |
|------|---|
| 代表挨拶 | 3 |
| 顧問より | 4 |

第1章 団体概要

| | |
|---------|---|
| 団体理念・目標 | 6 |
| 団体の歩み | 6 |

第2章 IDYF2017 概要

| | |
|----------|---|
| フォーラムテーマ | 8 |
| 議論の土台 | 9 |

第3章 フォーラム報告

第4章 運営報告

| | |
|----------|----|
| 事業スケジュール | 21 |
| 後援・協賛 | 21 |
| 運営スタッフ | 21 |

はじめに

代表挨拶

私たちはテクノロジーの急速な進化による時代の変わり目に直面しています。次々と誕生し進化するテクノロジーは世界のあらゆる地域と人々の間に浸透し、私たちを取り巻く環境は大きく変化しつつあります。これまで注目されなかった途上地域が先進国発祥のビジネスの拠点となったり、当たり前存在してきた職業や職種が消えつつあったりなど、今までは可能であった予測が困難になってきています。さらにテクノロジーがもたらした根本的な変化は人々に対して生き方を問い直すよう迫っています。このような状況においてその問いに対する答えを導き出すことの難しさ、さらに限られた一部の人間ではなく、あらゆる人々が答えを出すよう求められていることを考えると、関連する議論が広く一般に開かれることが不可欠であるほか、その議論は国内に留まらず、地球規模で有機的な繋がりを持って展開されることが必至となるでしょう。

当然ながら、私たちは単に変化の影響を受けるだけの受動的な存在ではなく、世界に変化をもたらす主体でもあります。その変化は規模・性質共に多岐に渡り、社会の根本を揺るがすものから取るに足らないようなものまで、ポジティブなものもネガティブなものも見られます。また、最初は歓迎されていた変化が後に受け入れられなくなる事態もあります。ネガティブな変化の中には、地球温暖化に代表される環境問題、福島やそれ以前に起きた原発事故とそれに続く災害、国境を越えて広がるテロなどの組織的犯罪、民族の対立が招く国家の分裂などが挙げられます。

こうした状況はしかし、私たちが起こしうるポジティブな変化によって改善することができると思います。IDYFは”Design Our Future”を理念として掲げ、国際開発課題に対して世界中のユースが熱く議論します。多様な価値観に触れることで培われる広く深い価値観や会議後も続く参加者同士の強固なネットワークは、同世代において上記諸事象への注意喚起を促し、より大規模かつ頻繁な議論の呼び水になります。そしてそれこそが、次代に希求される真のグローバルリーダーを生み出し、私たちが望む未来の実現に寄与するはずです。

団体発足 6 年目の 2018 年度において、この思いを参加者運営とともに共有し実現すべく、以下の 2 点に特に注力することをここに宣言したいと思います。

課題に対して、実行可能かつ有効な提案を創出すべく参加者同士が協働できる環境を整え、本フォーラム後も継続的なネットワーク構築ができる機会を提供すること
実行可能かつ課題に対して有効な提案を目指すことで、参加者が常に現実場面を想定しさらに様々なステークホルダーを考慮に入れた有効な提案ができると考えられます。その実現に向けて、妥協を許さない、しかし建設的で意義深い参加者同士の議論を促します。また、長期に渡る変化を可能にすべくフォーラム後も続くネットワーク構築を目指してフォーラム前後のイベントにも注力して参りたいと考えておりま

す。

最初に掲げた私たちの理念”Design Our Future”は今年度に掲げる目標の収束点でもあります。この意味で、運営委員会における当該理念への理解と共感が特に重要です。IDYF2018 運営委員会はあらゆる人々とともに将来を築きたいと願う同志にIDYF という舞台を提供することを心より望んでおります。”Design Our Future”の理念に共感し、日ごろより抱える熱望を表現したいと考える世界中のユースの皆様のご応募をお待ち申し上げます。

国際開発ユースフォーラム 2018 代表
野村 梨世

顧問より

日本の若者が「内向き」になったと言われるようになって久しい。日本国内にも数多くの課題が山積していることを思うと、ある程度は仕方ないことではあるけれども、他方で、世界にはまだ一人一日 100 円未満の所得水準で暮らす絶対貧困人口が約 13 億人（日本の総人口の 10 倍）おり、インドの幼児（5 歳未満）死亡率（6%）は日本のそれ（0.3%）の 20 倍である。IDYF を立ち上げた諸君のように、世界の問題に直接関わりを持つキャリアを目指す若者が、それでも少なからずいることは心強い限りである。

IDYF は今年で 6 年目の比較的若い団体だが、参加者のネットワークは着実に積み上げられている。毎年一つの共通課題を設定し、世界中から集った若者たちが集中的な議論を戦わせる。とりわけ海外参加者にとっては、日本人と日本社会に直接触れ、さらに日本の若者たちと密度の濃い議論の場を持つことは、彼らが将来的どのようなキャリアを志向するにせよ、大きなインパクトを持つであろう。

この文章を目にしている皆さんは、国際開発に多少なりとも関心を持っている人かもしれない。国際開発に関わるキャリアは途轍もなくやり甲斐があるものだ。好きで選んだ仕事は何十年やっても全く飽きないし、辛い時でもいくらでも頑張れる。しかし同時に、様々なしがらみもできてくる。途上国の様々な立場の人々（政策担当者、研究者、田舎のお百姓さんや日雇い農業労働者まで）と会話をする機会が頻繁にあるが、一度プロになると、そこでの人付き合いは特定の社会的文脈（援助や政策助言を「与える側」、研究成果を競うライバル、研究に必要なデータを収集する側、等）に縛られ、相手からもそういう目で見られがちになる。そのような自分の立場を離れて自由に交流をすることは、必ずしも容易ではない。

しかしながら、国内外を問わず、学生の時からの付き合いの友人は別だ。初めて出会った時のように、社会的立場のしがらみから自由に付き合える。この文章を目にしている人の中には、大学生も少なくないかもしれない。学問の世界は日進月歩である。例えば、開発経済学における過去 10 年程の間の分析手法の変化や実証的発

見の蓄積の速さには目を見張るものがある。ということは、大学で最新の学問知識を身につけたとしても、卒業して10年も経つとその知識自体は時代遅れになってしまう可能性も十分ある。他方、大学時代に築いた人脈は、一生の財産として、その価値は増えることこそあれ減ることは決してない。

今から約30年前になるが、私自身も大学生の時にゼミ合宿で夜通し議論をしたり、社会や社会との関わり方について昼間から酒を飲みながら語り合う友人たちと出会ったりすることができた。そこでの議論には、今思い出すと赤面するような、現実離れした「青臭い」ものも多々あったが、しかし、そのような青臭い時間を彼らと共有したことが、その後社会に出て様々な「現実」に直面した際にも一定の理想を追うことを諦めない、という姿勢を育んでくれたのではないか、と思っている。その友人たちは大学卒業後、民間企業、ジャーナリズム、役所、主婦、政治家、NGO、研究者など様々な方向に進んでいるが、30年経った今でも、昔ながらの社会的な柵のない付き合いが続く。そしてそのような交流は、自分の仕事にも、新鮮な刺激や反省の材料を与えてくれる。

そのような友人達が世界中の各地に散らばっているとすると、こんな魅力的なことはない。もし30年前にIDYFがあれば、私も真っ先に参加をしたことであろう。

東京大学公共政策大学院教授
不破信彦

1. 団体概要

1.1. 団体理念・目標

Design Our Future

この理念には、先進国・途上国から集まった若者たちが、その多様な価値観や経験を結集して、よりよい未来を共に作り上げるといった思いが込められています。未来を生きる若者たち自身が、多様な価値観を理解しあいながら世界の課題を共通の課題として認識し、一丸となって解決策を模索することで、よき未来を創発する力を手にすることを目指します。

●目標

1. 国際開発に関心があるユースの継続的なネットワーク構築

- ・世界中から国際開発に関心を有するユースを集め、将来にわたって活用できるネットワークを構築します。
- ・プログラムに創意工夫を凝らし、参加者同士の横のつながりを強固なものとしします。
- ・アラムナイ・ネットワークの維持・発展等により、参加者同士の年度を越えた、縦のつながりを強化します。

2. 多様な価値観と深い知見に触れる機会の提供

- ・専門家の方々の協力のもとにテーマに沿ったインプットを行い、参加者が知識や考えを広げる機会を提供します。
- ・多様なバックグラウンドをもつ参加者が議論を通して異なる考え方を知り、自らの価値観を深める機会を作ります。

3. 社会に新たな変化をもたらす成果の創出

- ・単に集まり議論するだけではなく、議論の成果が社会にとって価値あるものとなるよう努めます。
- ・国際開発に関心のある人々にとって、自らが生み出した成果が社会に変化を与える経験の第一歩となるよう、その機会を提供します。

団体のあゆみ

International Development Youth Forum (IDYF) は 2013 年に始まり、その後毎年 3 月に東京にて開催されてきました。開催を重ねるごとに、コンテンツや参加者の多様性の面で進化を続け、現在では世界でも有数の知名度を誇るユース国際会議の地位を獲得しています。6 年目を迎えた IDYF2018 では、昨年度に引き続き、運営側で諸経費を負担する奨学金制度を拡大し、経済的に厳しい状況にあるユースや開発

に関する豊富な知識や経験を持つユースをフォーラムに招く取り組みを行いました。

| 会議 | 開催地 | テーマ |
|----------|-----|---|
| IDYF2013 | 東京 | Future Millennial Development Goals -"Mirai" Development Goals- |
| IDYF2014 | 東京 | Design Thinking×Development |
| IDYF2015 | 東京 | Hunger×Win-Win |
| IDYF2016 | 東京 | Industrial Development & Environmental Protection |
| IDYF2017 | 東京 | What is development? Corporation and Development |
| IDYF2018 | 東京 | “How should we co-exist with ICT? Does ICT lead to peril or prosperity?” |

2. IDYF 2018 概要

2.1. フォーラムテーマ

大テーマ

“How should we co-exist with ICT? Does ICT lead to peril or prosperity?”

IDYF2018 では、歴代の理念“Design our future”の下に、テクノロジーと人間の共存を取上げます。現代において、私たちの生活はテクノロジー抜きに語ることはできません。医療・保健・製造・通信・交通・教育・商業・行政など社会の隅々までさまざまな技術がはりめぐらされています。このようなテクノロジーの活用は私たちの生活を便利で豊かなものにしています。

その一方で、「機械に仕事を奪われる」「AI もしくはロボットが人間に対し反乱起こし人類は滅亡する」といような言説も存在し、テクノロジーの進歩とそれに対する依存は必ずしも手放しで喜べない状況かもしれません。

IDYF2018 では、未来を担う若者を先進国・発展途上国の別なく幅広く集め、テクノロジーが社会にもたらす影響について参加者が熟慮・熟議を重ねて、自分たちの将来を描く場を用意します。

小テーマ

“How could the use/advancement of ICT contribute to achieving inclusiveness within society?”

近年、世界は前 3 回の産業革命に次ぐ「第 4 次産業革命」の時代を迎えつつあると言われていています。第 1 次産業革命は蒸気、第 2 次産業革命は電気、第 3 次産業革命はテクノロジーをそれぞれ使っていました。私たちが今まさに目の当たりにしており、したがって全体像を捕らえることが難しい第 4 次産業革命は、その直系にあたる第 3 次産業革命からもかなり距離を置いた存在だといえます。なぜなら、第 4 次産業革命は多様なテクノロジーを統一し混合させ、しかもより注目すべきことに身体・精神・物質・電子情報・生物学といった各領域の境界線を曖昧にするからです。ICT はさまざまな社会階層のみに浸透しちょっとした変化をもたらしたり、すっかり設計し直したりしています。その意味で、私たちは ICT を進歩させそれに依存し続けるより他に道はないのかもしれませんが、つまり、私たちは生活におけるほとんど全ての局面において、物事の再考・再定義・再設定をするよう迫られているとも言えるでしょう。ユースにとって、このように大規模かつ急激な変化の只中で自身が今どこにいるのか、またこれまで辿ってきた軌道に乗り続けるべきか、修正を加えるべきか、もしくは全く新しい道筋に沿うべきかを考えるのに適切な時期にきていると IDYF2018 は捉えています。なお、具体的に以下 3 つの事例について議論をします。

2.2. 議論の土台

上記テーマに沿いながら、以下 3 つの具体例を土台として、各チームが議論を行いました。

1. 「日本の働き方改革における ICT の導入」

日本ではこれまで長い間議論されてきた働き方改革について、2018 年政策の施行に向けて本格的に動き出しています。中でも長時間労働の問題は女性の労働市場へのアクセスを制限し、男性による高齢者の介護を理由とした休職率の増加させるなど、ワークライフバランスを核とする諸問題を引き起こし、長時間労働や既存の評価基準の是正が求められていることを露見させています。一方、長時間労働により阻害されてきたワークライフバランスの実現は、テレワークの導入や AI の誕生による時間や場所を問わない働き方の可能性が生まれることで改善されつつあります。この変化はまた、「労働総時間」ではなく「時時間当たりの生産量(労働生産性)」に基づく評価体制を敷くという二次的な変化をも起こしつつあります。しかしながらこうした ICT 活用の議論や決定権は社会の一部の人々の間に留まっています。ICT の可能性を解き放ち、柔軟性というその最大の利点をワークライフバランスのために生かすには、関連する議論がより一般の人々に開かれ、またより頻繁に行われる必要があると考えます。本会議では、労働市場での ICT 活用の在り方を再考し、ワークライフバランスに支障をきたしている施策や労働環境に対して ICT 技術による解決策を議論します。

2. 「ベトナムの農業における ICT の活用」

アグリ・インフォマティクスと呼ばれる、データ分析に基づいて適切なアドバイスを提供するシステムが大きく注目されています。生産の効率化、低コスト化、専門的な経営、人材育成、信頼性など様々な問題を解決できて農業の第 6 時産業化が促進されるからであります。ベトナムでは、2010 年の ICT 早期強化プロジェクトに関する首相決定に基づいて、2020 年までに ICT 技術を農村まで拡大しようと努力しています。ICT 協力を謳った日越共同声明を受けて、JICA はベトナムでの AI に関する ODA 輸出に傾注しています。本会議では、日本がベトナムで行っている農業情報支援事業を様々な角度から分析し、どのような開発であるべきで、かつどのように改善できるのかを考えます。

3. 「コロンビアの紛争後の平和構築における ICT の役割」

コロンビアは内戦とそれに続く複数の危機を 1960 年から 50 年の長きにわたり経験しました。FARC (コロンビア革命軍) と ELN (民族解放軍) の 2 大ゲリラ勢力は 政府に対し活発に反乱を起こし、麻薬取引や人身売買といった国際的組織犯罪により活動資金を調達していました。現在、政府はいずれの勢力とも終戦協定を締結し、紛争後の復興と発展に向けて舵を切りました。コロンビアの ICT 大臣は ICT が社会の統合を進め、市民参画を促し、民主化の定着に資し、以って復興と開発を加速さ

せるとしています。国家的な ICT 大綱である “Vive Digital 2018”は ①働き方の改善 ②雇用創出③企業家支援④都市と地域の転換を 4 本柱に据えています。しかし同時に大臣は高齢者や障がい者はこうした社会の抜本的な変化に際してより大きな困難を抱えるとも認め、懸念しています。さらに国内外の努力にも係わらず若者の失業率は 17%近いのです。本ケーススタディにおける要点は「コロンビアにおける ICT 活用・発達への情熱はデジタル・デバイド、高い若者の失業率、紛争後の復興という諸問題の解決に繋がるのか」であると考えます。参加者は ICT 活用がコロンビアにおいて相応の解決策であるのか状況を混乱させるだけなのかについて社会に存在する様々なギャップを念頭において熟慮します。

第3章 フォーラム報告

IDYF2018は、2017年3月11日～18日に、以下の日程で開催致しました。

| | 午前 | 午後 | 夜 |
|--------------|------------|--------------|----------------|
| 3月11日 (日) | | | 開会式 |
| 3月12日 (月) | 基調講演 | 全体議論 | Karaoke night |
| 3月13日 (火) | 専門家との勉強会 | 議論 (課題分析) | |
| 3月14日 (水) | 専門家との勉強会 | 議論 (課題分析) | |
| 3月15日 (木) | 議論 (解決策考案) | 議論 (解決策考案) | Cultural Party |
| 3月16日 (金) | 議論 (解決策考案) | 議論 (解決策考案) | |
| 3月17日 (土) | リハーサル | 最終報告会 閉会式 | 懇親会 |
| 3月18日 (日) | 観光 (オプション) | | |

以下、各企画での詳細を、時間を追いながらご報告致します。

<DAY 1> 11th, March

午後3時過ぎ、参加者が空港から会場となる『国立オリンピック記念青少年総合センター』に続々と集まってきました。参加者のチェックインを終えた後は、オリンピックセンター内のレストラン『カフェフレンズ』にて開会式を兼ねた歓迎会を行いました。長いフライトの後にも関わらず、参加者同士が自己紹介のみならず、活発に議論する様子も見られました。歓迎会は盛り上がりを見せ、深夜まで続きました。

<DAY 2> 12th, March

この日は、フォーラム中に議論を行うにあたり、入門的なコンテンツを用意しました。午前には、基調講演の後援者である、NPO法人エドテックグローバル（以

下、エドテックグローバル)より栗野泰成様をお迎えしました。栗野様より、エドテックグローバルについてお話いただきました。エドテックグローバルとは何か、何をしているのか、世界がどうなってほしいと考えているのか、そして、いかにして参加者と同世代の若者をエンパワーしているかといったお話をいただきました。午後は(1)リーダーシップ、(2)インクルーシブについて議論を行いました。IDYF2018の大テーマに照らして、参加者は自身の洞察について共有し考えを深めました。以下、それぞれの詳細をお伝えします。

NPO 法人エドテックグローバルのヴィジョンは「IT による平和な世界の実現」であり、ミッションとして「発展途上国の子どもや若者を、平和な世界を実現する精神を持った『グローバルリーダー』に育てること」を掲げています。栗野様はいかにエドテックグローバルが、いかにして暴力を減らし、ICTによって世界中に平和をもたらすのかについて説明しました。エドテックグローバルが行っていることは、紛争の影響を受ける地域の学生に教育を施し、学生たちが次世代のリーダーになるように努めることであると言います。唯一の被爆国として、日本は戦争や紛争下の若者をエンパワーすることで、世界を牽引すべきであり、またすることができると述べました。彼は可視化できる現象の裏には、実際に戦争や紛争を引き起こした不可視な要因が隠れていると強調しました。例えば、ルワンダは1990年代の大規模なジェノサイドで知られています。この悲劇は宗教の違いによるものだと一般に理解されていますが、実際にはこの状況がエスカレートした結果生じた飢饉と食料不足によるものであったと述べています。数人の参加者も指摘したように、教育のインパクトを評定することは難しいですが、平和は何もないところには生じないのであり、平和を創出するために努力する必要があることを学びました。このことは栗野様から得た最大の学びであり、フォーラム初日であったこの日にとって素晴らしい幕開けでした。

午後は、2つの大きなテーマであるインクルーシブとリーダーシップをディスカッションテーマとして用意しました。このディスカッションの目的は、これら2つの用語を現実の生活場面で参加者に理解してもらうことでした。参加者は、自分自身が経験したことのある排斥に関するエピソードを考え、お互いに共有しました。さらに、リーダーについては、自分自身の経験したリーダーの経験や理想とするリーダー像を出したうえで、インクルーシブを実現するリーダーについても議論しました。

このディスカッションを終えると、運営委員会の研究チームからIDYF2018の大テーマに関するプレゼンテーションを行いました。アウトラインに関しては、ウェブサイトには詳しいですが、今回はより深く研究チームが説明を行いました。

その後は、IDYF2018の奨学金参加者によるプレゼンテーションの発表でした。IDYF2018では、皆様の協賛の下、選考過程で最も優秀と判断されたバングラディッシュよりMashrekurとメキシコよりRaulという2人の奨学金参加者を出しました。私たちはこの2人に彼らが担当するケーススタディに関するプレゼンテーションをしてもらいました。Mashrekurは農業のチームで、彼はアグロインフォマティクスの基礎的なメカニズムについて説明し、バングラディッシュとベトナムとを比較しました。Raulは彼の出身国であるメキシコについて紹介し、今回のケーススタディで取り上げ

るコロンビアに似ていることを説明しました。彼は、メキシコでの実用例とともに平和構築における ICT の重要性を強調しました。

<この日お世話になった方々>

NPO 法人エドテックグローバル 栗野泰成様

<DAY 3> 13th, March

この日から参加者はケーススタディに基づいて 3 つのグループに分かれ、13 日と 14 日の 2 日間にかけてそれぞれのケースに関する専門家にお越しいただき、勉強会を行いました。

「日本の働き方改革における ICT の導入」

「日本の働き方改革における ICT の導入」チーム（以下、働き方改革チーム）では、ドイツ証券株式会社（以下、ドイツ証券）の三保友賀様にお越しいただきました。三保様は、ドイツ証券において、ダイバーシティ&インクルージョン (D&I) を推進しており、同時に在日米国商工会議所の Women in Business Committee の副委員長もなさっています。日本においてダイバーシティといえば、女性の活躍のみ取り扱う傾向があり、それすらも未だ課題山積している状況であることから、日本ではダイバーシティに関しては遅れをとってしまっているのが現状です。そのため、こうした前途多難な状況下において、精力的にダイバーシティを推進している方のおひとりである三保様にお越しいただいてことは非常に貴重なことでありました。

勉強会の初日には、三保様より冊子になるほどの大量の資料を参加者に配布いただきました。日本の働き方改革について三保様は女性の活躍推進に関するムーブメントと重ねながらお話いただきました。また、単に女性が企業といった経済界で活躍するという側面だけではなく、DV といったドメスティックな側面における女性の現状についても言及くださいました。女性が活躍するといっても様々な方面でその可能性があり、また様々な立場の女性の数だけ生き方、そして働き方があることを理解しました。

「ベトナムの農業における ICT の活用」

この日の「ベトナムの農業における ICT 活用」チーム（以下、農業チーム）は、参加者がフードバリューチェーンについて理解することを目的としました。そのため、午前中まず初めにフードバリューチェーンの定義づけを行い、それからベトナムにおけるフードバリューチェーンに関して議論を行いました。同時に午後からプレゼンテーションをくださった JICA の森田裕子様と東郷知沙様への質問を練りました。

参加者はそれから最初にフードバリューチェーンそして、その要となるアクターを定義づけ、そしてベトナムの事例日て検討しました。参加者が発見した中心的な問題は、ベトナムにおけるフードバリューチェーンが低い生産性によって阻まれていることでした。例えば、米は高い収穫量ですが低い品質であり、それがベトナムの米のマーケットに打撃を与えています。午前中のディスカッションの結論は、まずフードバリューチェーンの生産水準に焦点を当て、そして農家にも焦点を当てるということでした。フードバリューチェーンはただ不足するべきではないということだけでは

なく、農家もまた作物の質を向上させる必要があり、そのために農家は自分たちの土地の生態システムを保護する必要があるということが参加者同士で確認されました。そして参加者たちは JIAC に尋ねる質問として「いかにして価格を上げずに作物の質を向上させるのか」という質問に決めました。

午後は JICA の森田様と東郷様によるプレゼンテーションでした。その間は随時質問の時間が設けられました。プレゼンテーションの前半では、ベトナムで豊富な業務経験のある森田様より、ベトナムにおけるフードバリューチェーン促進や ICT の導入の挑戦についてお話いただきました。森田様のお話はご自身が現地で体験した事実に基づいており非常に切実なものでした。

東郷様はプレゼンテーションの後半を担当なさり、フードバリューチェーンを向上し短縮するためのベトナムにおける ICT 導入に関する具体的なケーススタディについてお話しました。そのケースでは、農家がどの商品が販売可能であるか、誰に売ることができるかということを経営者がスマートフォンを通して知ることができるというものでした。このメソッドを通して、農家は無駄なく、非常に繊細な商品である果物や野菜を売ることができるそうです。これがプレゼンテーションの結論でしたが、これは参加者が解決策を考えるうえでアイデアを与えうるものでした。

プレゼンテーション終了後、参加者は 1 時間ほどディスカッションを行いました。そこでは、参加者たちは新たな観点を得たことでベトナムの状況の改善に向けてより具体的な考えを打ち出すことができるようになっていました。

「コロンビアの紛争後の平和構築における ICT の役割」

勉強会初日には、上智大学の幡谷則子教授をお迎えしました。幡谷教授はコロンビア社会の研究をなさっており、主にヒスパニック専攻で授業を持っています。私たちの中でコロンビアの状況を身近に感じている人はおらず、幡谷教授のようなラテンアメリカの専門家をお迎えしたことは、素晴らしい機会でした。特に、幡谷教授は最近、都市研究の一方で、連帯経済と発達の二者択一のモデルに非常に注意を払っています。これは私たちに独特な観点を与えるものでした。コロンビアの紛争は、実際には社会での大きな経済格差によるものであるということです。状況は想像以上に複雑ですが、それは完全にコロンビアでは道理にかなったものであることを幡谷教授は私たちに説明しました。

GDP や GDP 成長率といった国際的に使用される経済指標を見ると、コロンビアは一定速度で成長しているように見えます。平均値や中央値だけを見るとすればそれは誤りとなります。しかし、実際には大きなギャップが存在するのであり、ゲリラ戦闘員や他の反社会的グループがそれを利用しているそうです。彼らは自分たちに従わせるために経済的に余裕のない人々にインセンティブを与えているといいます。一例を挙げると、1990 年代からゲリラグループはコカインのビジネスを支配し、彼らの影響下の地域の農家に対し、それが強制であれ、農家自身の意志であれ、コカインの葉を育てさせました。というのは、他に生計を立てる術がないのです。しかも、都市部では同様の現象が起こっていることはわからないという側面もありました。これにより都市部と農村地域との間でゲリラグループに対する政府の平和合意への感情や意見に亀裂が生じています。結果的に、コロンビア社会では、平和合意ですら未だ不安定な状態です。これが幡谷教授からの一連の説明でした。

紛争という言葉は身体的暴力あるいは実際の攻撃と結びついているほうがより自然なはずですが、コロンビアのケースだけではありません。その国のわずかな非典型

的な状況を知り、「平和」という概念が一つの観点から理解できないということを再確認することは、参加者には印象的だったようです。それを表すかのように、その後の質疑応答では、インタラクティブで活発な時間となりました。

<この日お世話になった方々>
ドイツ証券株式会社 三保友賀様
JICA 森田裕子様、東郷知沙様
上智大学 幡谷則子教授

<DAY 4> 14th, March

「日本の働き方改革における ICT の導入」

働き方改革チームは午前中、Yahoo Lodge を訪れました。Yahoo Lodge は会社や家とは違う新たなワーキングプレースであり、見知らぬ人たちが集まることで相互交流が生まれ、さらに新たなアイデアやプロジェクトが創出されることを狙っています。登録すれば誰でも利用可能であるという利便性や働き方が問題視される一方で新たなムーブメントがあることを参加者に知ってもらうため、Yahoo Lodge を紹介することを決めました。参加者には狙い通りに Yahoo Lodge のユニークなところを知ってもらったほか、インターネットの会社というイメージの強い Yahoo が運営しているということに注目しているようでした。

午後は 13 日に引き続き三保様にお越しいただき、参加者とのディスカッションを行っていただきました。三保様は前日の様子から参加者同士がまだ思い切りディスカッションをできていないのではないかと推察し、13 日よりさらに参加者同士のコミュニケーションを重視した勉強会を開いてくださりました。働き方改革は非常に多様性に富んだ参加者の集まりでした。自国の官僚や複数の大学を出て次は日本の大学で修士をとる社会人、日本の IT 企業でインターン経験のある大学生まで、出身国はもちろん、年齢も立場も全く異なっていました。そのため、それぞれの参加者の感じる働き方の考え方も異なるものでした。例えば、自国で官僚として働く参加者は、自分の働く省庁の建物の前には意見箱があり、そこで国民の声を拾い、国全体で様々な問題を解決していこうという雰囲気があると言い、多忙な中でも自分が働くことで確実に人のためになっているという実感が湧き、常にやりがいを感じているといます。また、日本でインターンをしたことのある参加者は、外国人である自分に対して不寛容な態度であったことがショックだったといい、そこで働き方改革で要となる多様な働き方を認める姿勢も阻まれていると感じたといます。このようにして参加者は、働き方を自分であればいかにして変えていきたいかを考えました。三保様がお帰りになったあとのディスカッションでは、参加者たちは、それらを現在の日本の働き方改革の背景や経緯、内容と結びつけ、日本の現状の働き方に対する問題意識を深め、より具体的な施策を考えることができました。

「ベトナムの農業における ICT の活用」

この日、農業チームは、フォーラム会場付近にある代々木公園を散歩し、そのまま明治神宮を訪れるなど、外でリフレッシュしながら議論の方向性について話し合いました。午後には、四ツ谷にある独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）のオフィスを訪問しました。そこでは参加者が ICT と開発に関する様々なトピックについて、3 名の方からプレゼンテーションをいただきました。最初に、JICA の職員である篠原雄之様にお話しいただきました。いかにそれが開発の研究において考慮に入れているのか、それが日本の開発にとっていかなる意味を持つのかというお話でした。同じく JICA 職員である宮坂和憲様は参加者のスマホにあるアプリケーションをダウンロードするように勧めました。それは、Shep Game というアプリケーションで JICA が開発したものです。Shep Game は合理的な経済に関する判断をするための教育を施すべく、アフリカの農家の家族に使ってもらっているとのことでした。宮坂様は数年間アフリカで働き、その経験を共有してくださりました。宮坂様の説明によると、Shep Game は農家だけではなく、JICA 職員が農家が直面しうる判断を理解するのに使われているといいます。資源と経済が限られた地方の農家の立場でゲームを進めることで、JICA 職員や他の国際的に働く人々が、自分たちが改善しようとしている環境下の日々の生活の現実をより深く理解することになるとのことでした。このことは教育のための ICT 利用が両者の合意の下に行われる必要があることを示すものでした。必要に迫られた集団に対して教育を行うことは重要である一方で、ICT は国際的に働く人々がより自分たちの働く環境を理解し、適切な判断を下すようになるというより高次の目的のために機能すべきと考えます。最後に竹内知成様にお話しいただきました。竹内様もフォーラム中は JICA の職員として働いていらっしゃり、現在はアビームコンサルティング株式会社でご活躍なさっています。竹内様は当初はプレゼンテーションをなさる予定はなく聴講にいらっしゃったのですが、JICA での ICT 関連のプロジェクトでの豊富な経験を活かして、急遽参加者からの質問に答えてくださりました。質問への回答からさらに 3 名によるディスカッションが生まれ、漁業における ICT の利用から、国がスポンサーとなる倫理的問題まで、のちに参加者全員が本当に素晴らしい時間だったと述べたように、実りある議論を展開してくださりました。

「コロンビアの紛争後の平和構築における ICT の役割」

この日、平和構築チームは、ドレミング株式会社（以下、ドレミング）を訪問しました。ドレミングは福岡を拠点とするフィンテックの会社で、世界規模で貧困や不平等を是正することを狙いとしています。最近、ドレミングでは、20 億人の労働者が公的な金融サービスへのアクセスを持たず、非常に高額な融資の形によって搾取されているという問題の解決に向けて動いています。

ドレミングの CEO である高崎将紘様は、私たちにサウジアラビアでの最近の写真を見せてくださりました。その写真には、支払日に 1.5 時間銀行の前で数十人の人たちが列をなしている風景です。高崎様によると、写真は送金のために強い日差しの下で貴重な時間を消費し、高い料金を支払っている労働者の搾取という問題を表しているといいます。

さらに高崎様は、支払日のために月の終わりまで待つことはその日暮らしをする人には厳しいことであるといいます。多くの方は、結果的にローンがかさみ、さらなる問題を引き起こし、その人自身だけでなく家族にとっても耐え難い状況に陥ると指摘します。

ドレミングはこの金融搾取のサイクルを断ち切ろうとしています。ドレミングのモバイルアプリケーションによって、労働者がその日に稼いだ給料をいつでも受け取ることができる、素早いアクセスを手に入れ、スムーズなキャッシュフローや個人のお金を入手することができます。

雇用者はリアルタイムの支払いのプラットフォームを通してこの支払過程を管理します。そのプラットフォームでは、仕事を終わるとそれぞれの労働者の給料と税金が計算されます。仕事の後に労働者はドレミングのアプリを使って、給料で店で買い物をしたり、家族に送金することができます、このようにして、ドレミングは”financial inclusion”を実現しています。

私たちは、お金に対する見方—デジタルの仕組みによって、お金が「単なる形象」に過ぎなくなったということについて、意見や感情を共有しました。コンピュータのスクリーンに表示される数字を信用できずに手渡しのほうがいいと感じる家族もいるのではないかという参加者もいました。

テクノロジーの進歩は生産性を飛躍的に向上させ、貧困を減らし、私達に恩恵をもたらしたので、おそらく世界は私達が私達の生活の隅々でテクノロジーを使う必要があるという点で同意しています。責任ある機関と新しいテクノロジー開発をすべての人、特に弱者や社会から取り残されている人のためになるための方法として私たちは必要とするでしょう。

ドレミングでのセッションのあと、残った時間を使って第二次世界大戦の記憶を残す場所として靖国神社を訪れました。神社内の博物館である遊就館にも立ち寄りしました。靖国神社は外交上の様々な議論がありますが、訪問自体は世界平和について改めて考えさせるものでした。

<この日お世話になった方々>

ドイツ証券株式会社 三保友賀様

独立行政法人国際協力機構 篠原雄之様、宮坂和憲様

前職独立行政法人国際協力機構、現職アビームコンサルティング株式会社 竹

内知成様

ドレミング株式会社 高崎将紘様

<DAY 5> 15th, March

この日は、参加者がそれぞれのチームごとに解決策考案に向けて本格的なディスカッションを行う日でした。これまでのスケジュールでは、働き方改革チーム、農

業チーム、平和構築チームの 3 つのテーマごとに活動を行っていましたが、この日からは初日に参加者同士で決めたグループでの議論でした。働き方改革チームは全員で 1 チームとなり、農業チームと平和構築チームはそれぞれ 2 チームに分かれました。この日の最後に何が特に各ケースの課題であるのかを分析したうえで発表してもらう予定でした。どのチームも議論は活発になされたものの、誰が、どの対象に向けて施策を行うのかという点が不明確なチームが多く、ナローダウンしきれていない点が課題でした。運営委員会の研究チームでは、翌日から議論により入っていくことで、解決策をより洗練させる方向に軌道修正することに決めて、この日の議論が終わりました。

この日の夜は特別でした。それというのは、例年行っている Cultural Party をこの日に行うことに決めていました。このパーティーでは、参加者が出身地域の民族衣装を着たり、伝統的なお菓子を持ち寄ることで、参加者同士の親交を深めると同時に、各国理解も促進させることが目的でした。さらに、IDYF2018 に協賛いただいた企業の皆様にもお越しいただき、日本から世界に向けてご活躍なさる皆様より事業内容に関するプレゼンテーションをいただき、より日本での世界でのプレゼンスを参加者に知ってもらうと同時に、そして私たち IDYF を支える皆様を知ってもらうことで IDYF についてもより理解してもらいました。この日お越しいただいたのは、パシフィックコンサルタンツ株式会社（以下、パシフィックコンサルタンツ）より岡野里紗様と菅真奈美様、そして株式会社キタイエ（以下、キタイエ）より代表取締役の喜多恒介様でした。最初にプレゼンテーションいただいた喜多様は、今回のパーティーの趣旨に合わせて日本の阿波踊りを紹介してくださり、その場で参加者も一緒に踊って体験するという楽しいコンテンツをご用意くださいました。その後のプレゼンテーションでは、喜多様が大学生を中心とした若者にグローバルリーダーとして育成するためのプログラムを提供していることをご説明くださいました。その中で、喜多様は自分の深い部分から湧き上がってくるパッションに従うことが何よりも大事であるとお話くださいました。参加者の中には実際にグローバルリーダーを目指す人も多く、実際に現在リーダーシップを発揮し様々な場面で活躍している参加者がほとんどです。活躍するフィールドは異なれど、次世代を担う立場であれば必ず響くであろうメッセージをいただき、多くの参加者に忘れられない機会となったのではないかと思います。岡野様、菅様からはパシフィックコンサルタンツ株式会社の海外展開に関するお話をいただきました。どの国のどのような開発領域で、開発コンサルタントとして影響を与えているのかをご説明いただきました。パシフィックコンサルタンツが事業展開する国には、多くの参加者の出身国が含まれていました。その後の質疑応答では、参加者から自分の国での具体的なコンサルティング業務について尋ねる質問が複数挙がりました。プレゼンテーションのあとは、クイズや談笑により、より打ち解けた雰囲気での交流会でした。議論が順調にいかずにいたチームの参加者もこのときばかりは非常に穏やかな様子で、どの参加者も心から楽しんでいました。

<この日お世話になった方々>

パシフィックコンサルタンツ株式会社 岡野里紗様、菅真奈美様
株式会社キタイエ 喜多恒介様

<DAY 6> 16th, March

この日は議論の最終日となりました。翌日に控えた最終プレゼンテーションで

は、パワーポイントを使って、自分たちが考案した解決策を提案します。そのパワーポイントは、この日の 17 時まで提出することが最終プレゼンテーション参加の必須条件でありました。そのため、この日は限られた時間内で、議論の成果を随時パワーポイントに落とし込んでいくことも課題でした。午前中は 30 分ほど運営委員よりプレゼンテーションやパワーポイントの極意を話しました。このプレゼンテーションを担当した運営委員は IDYF2017 の参加者で、自分の経験を存分に活かしてくれました。議論が始まると前日の様子から、研究チームで積極的に各チームの議論のナローダウンに向けて、ファシリテーションを行いました。ナローダウンさせることに手間を感じ始める参加者も見受けられる一方で、最後まで考え抜きたい参加者もあり、小さな衝突もいくつかのチームでありました。”Design Our Future”を理念として掲げる運営委員会としては、私たちは参加者に自分ごととして受け止め、妥協せずに議論してほしいという思いがありました。私たちと参加者との間で、勉強会にご協力くださった皆様のことやお話しいただいた内容に立ち返り、議論の洗練化に最後まで努めました。17 時には無事、すべてのチームからパワーポイントを回収しました。余裕をもって提出したチームが多い中、締め切り直前まで粘ったチームが提出後、満足した顔をしていたことが印象的でした。そのチームの様子から、本気で国際開発について議論してくれたことが伺えました。17 時以降はプレゼンテーションのブラッシュアップし、各チームが念入りに準備していた様子でした。

<DAY 7> 17th, March

ついに最終プレゼンテーションの日を迎えました。午前中はリハーサルの時間として使い、発表の順番を決めたり、パワーポイントの修正は認められませんでした。発表の詰めの作業を行いました。

午後に入り最終プレゼンテーションの時間が近づくと、聴講者がお見えになり会場の緊張感が高まりました。定刻になると開会挨拶のあと、プレゼンテーションの講評者として、先に登場した当時 JICA、現アビームコンサルティングの竹内知成様、そして NEC Corporation の宮崎裕介様をお迎えしました。

最初のプレゼンテーションは働き方改革チームでした。働き方改革チームは、政府が掲げる働き方改革 9 つのテーマのうち、「所得と生産性の向上」、「長時間労働の是正」に焦点を当て、これらを解消すべく、働き方の柔軟性とそのためのテレワークの導入を解決の糸口と考えました。具体的には労働環境にゲームを取り入れるというものです。ある仕事をこなすことでポイントがたまり、同時に労働時間も計測できるというものでした。次は農業チームでした。農業チームからは、“Agristars”と“Agrojin”の 2 チームによるプレゼンテーションでした。Agristars はこれまで議論してきたフードバリューチェーンにおける投資と経済的支援の不十分さを問題視し、“Agriculture-Investment-Assurance”という保証に関するシステムの導入を提案しました。このシステムでは、ICT システムによって、地元政府と投資家、農家がつながるシステムです。政府と投資家、そして政府と農家が国家予算による保証でつながり、投資家と農家が信頼に基づく保証でつながるというものです。Agrojin はフードバリューチェーンにおいて、生産性、収入、質の 3 つに問題があると考えました。さらにそれぞれの問題の背景には、情報不足、ブランディング、価格に見直すべき課題があると考えました。それらの解消法として”Inclusive Community Tackles”を提案しました。”Inclusive Community Tackles”とは、女性、高齢者、障害者といった雇用から抜け落ちてしまった人々により運営される農業のコミュニティを指します。その

コミュニティは、農家から受け取った農作物の商品としての質や量を評価し、商品のパッケージ化し、販売者に受け渡すということが役割になります。最後は平和構築チームの発表でした。”Tokyo Dragons”と”コロンビアの平和構築”チームでした。”Tokyo Dragon”は政府が抱える反政府団体への問題には、市民団体をはじめとするソーシャルな機関の欠如、適切なインフラの欠如が関わっていると考えました。解決策として”E-Governance”を提案しました。E-Governance は、平和と繁栄を構築すべく政府とあらゆる市民が意見交換をできるアプリケーションです。もう一つの平和構築のチームは、平和構築のためには、農村地域における機会の不足、特に若者の高い非就職率に着目し、それが結果的に現在 FARC による戦争、薬物などの諸問題を引き起こしていると考えました。”Skill don't kill”という言葉を用いて、農村地域の若者の ICT スキルをはじめとするアントレプレナーシップのスキルを身につけるプログラムを提供するという提案を行いました。

どのチームも講評いただくお二人から提案の現実性について指摘を受けました。例えば、「これを導入することで誰がメリットを受けることになるのか」、「トップの人間が導入したいと思うポイントはどこか」、「国をいかに巻き込んでいくのか」といった質問です。特に印象的だったのは”Think global, act local”という言葉です。一見大規模プロジェクトであっても、まずは小さく動いているということを強調されました。準備段階でナローダウンせずに大局的な話で完結しがちだったところを突くお言葉をここでいただくことになりました。また、大局的な話で完結してしまうゆえに、理想を語って終わってしまい、自分たちの提案の問題点を吟味しきれていないということにもなりえます。国際開発を本気で解決するには、地に足をつけることも重要であることを学んだ最終日でした。

最終プレゼンテーション終了後は閉会式でした。フォーラム 1 週間の様子を映した映像を流し、参加者全員に修了証を渡しました。その後は Farewell Party を『カフェフレンズ』で行いました。どの参加者も 1 週間の議論を終えて疲れもあったはずですが、参加者全員が集まる最後の日を楽しんでいました。

<この日お世話になった方々>

前職独立行政法人国際協力機構、現職アビームコンサルティング株式会社 竹内知成様

NEC Corporation 宮崎裕介様

<DAY 8> 18th, March

この日はオプションツアーの日でした。希望者のみではありましたが、結果的にほとんどの参加者が参加することになりました。チェックアウトのあと、参加者たちは二手に分かれ、1 グループは鎌倉に、もう 1 グループは浅草に向かいました。浅草チームは日本らしい蕎麦屋で昼食をとりました。鍋焼きうどんや、ざるそば、海鮮そばなど、各自で好きな食事を楽しみつつ、フォーラムを振り返ったり、浅草の観光地の歴史を説明したりしました。昼食後は、特に観光地としてにぎわう浅草寺を訪れました。その歴史から外見まで日本独特な特徴にあふれ、海外から来た参加者は終始興味津々でした。休日であったので何時にも増して人でごった返す浅草寺の通りを抜け、少し離れたところにあるお茶屋であんみつを全員でいただきました。そこでは、改めて自分の国の話になりました。運営委員と参加者の中でそれぞれ中国留学者がいたため、中国が近年どれほどの成長を遂げているのかということが話になりました。

仲見世通りを歩ききると、参加者のフライトの時間もあり、浅草チームはお開きとなりました。

一方、比較的海沿いで東京に近い鎌倉に行ったチームは、数々の神社仏閣や巨大な大仏を観光に行きました。昼食頃には、鎌倉駅周辺を案内し、最も有名な神社である鶴岡八幡宮に向かいました。そこでは、偶然伝統的なウェディングスタイルである神前式を見ることができました。さらにはおみくじを引いたり、楽しい時間を過ごしました。その後は、商店の並びで地元の食べ物を食べ歩きました。各自好きなどころで昼食をとったあとは東京へ向かいました。東京を離れて日本の美しい街を紹介し、日本の文化を伝えられたことは運営委員にとっても素晴らしい時間でした。

第4章 運営報告

運営スケジュール

IDYF2018は以下のようなスケジュールで行われました。

| | |
|----------------|----------------------------|
| 2017年9月 | 運営組織発足 IDYF2018大会テーマの策定 |
| 2017年9月~10月 | 議題や選考課題の設定 |
| 2017年11月~12月 | 参加者選考 |
| 2018年1月~2月 | ビザ手続き、プログラムの調整 |
| 2018年3月11日~18日 | IDYF2018開催 |

後援・協賛

本年度も多くの企業様・団体様のご支援により、当フォーラムを無事開催することができました。IDYFスタッフ一同、改めて厚く御礼申し上げます。

【後援】

外務省

【協賛】

株式会社ネオトラディション

【助成】

株式会社キタイエ

パシフィックコンサルタンツ株式会社

(以上五十音順、敬称略)

また、後援・協賛といった形以外でも数多くの方々にご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

運営スタッフ

運営スタッフ構成（所属はフォーラム開催当時）

| 役職 | 氏名 |
|-------|-----------------------------|
| 代表 | 野村梨世 |
| 研究・広報 | 松井春香 |
| 研究 | 彭思雄 |
| 渉外・会計 | 佐藤真由 |
| 渉外・会計 | 鎌倉眞子 |
| 総務 | Eva Nelson |
| 総務 | Madeleine Hahn de Bykhovetz |
| 総務 | 笹森宥穂 |

その他、当日スタッフの方にもご協力いただきました。誠にありがとうございました。

【発行主体】

国際開発ユースフォーラム 2018 運営チーム

国際開発ユースフォーラム 2018 の開催を目的とした運営組織。13名の大学生・大学院生で構成される。2018年秋に発足し、開催準備を担った。

HP : <http://www.idy-ttokyo-forum.com/>

Facebook : <https://www.facebook.com/idyforum/>

国際開発ユースフォーラム 2018 報告書

2018年10月 発行

